

宗教共同体における音楽文化の構成

—アレppoのシリア正教会ウルファグループに関する一考察—

栗 倉 宏 子

アレppoは世界最古の都市の一つといわれる長い歴史を誇る都市であるが、その歴史と地理的位置によって、都市内部に他では見られないほど様々の民族的及び宗教的共同体を抱えている。この研究は、1984年2月と1985年8～9月の二度の現地調査に基いて、アレppoにおける、共同体と音楽文化の伝統のあり方を探ろうとするものである。これら民族的及び宗教的共同体が、一つの都市内に共生するうちに、どの程度固有の音楽文化を現在保持しているか、そしてそれらの伝統は共同体の成員が共同体を維持してゆく（あるいは単に意識として共同体に属してゆく）うえでどのような働きをもっているかを考察する。またこの観点は、どのように共同体固有の音楽文化が失われつつあるかを示すものともなる。

ここで大切であるのは、都市には、共同体の伝統との関係からみて、正反対の役割をもつ二種類の音楽があると考えられることである。その一は、ある特定の共同体内で保持される音楽であり、その二は、特定の共同体の枠を超えて伝達され共有される音楽である。後者にはマス・メディアによる音楽も含まれる。都市の音楽文化を形成してゆくものは、基本的に、この二つの相反する方向性をもつ音楽からなると思われる。本稿では、共同体内で保持される音楽と、共同体の枠を超えて伝達される音楽という、対立する二つの種類の音楽という視点を設定してみたい。この二つの種類の音楽が、一つのある特定の共同体における音楽文化の中で、それぞれどのように存在し、どのようにその共同体固有の伝統と関連し、さらにはどのようにその共同体文化の現在の成り立ちの上で役割を果たしているかを

探ってゆきたい。

考察の対象としては、シリアに古くから存在する東方諸教会の一、シリア正教会の中の一共同体をとりあげる。シリア正教会そのものは五世紀に分離して以来、西アジアに伝統を保っている古い宗教共同体であるが、ここにとりあげる共同体は第一次大戦後トルコ領内の都市ウルファ（ギリシア語名エデッサ：古来シリア正教の中心地の一つであった）からアレppoへ移住してきた人々である。1920年仏軍がウルファに入った時共同体の一部の人々が協力したために、その後共同体全体が財産も仕事も捨てての集団移住を余儀なくされたという歴史を持つ彼らは、現在でも非常に固い共同体的結束を保っている。そしてアレppoという都市の中でも少数派に属する。この少数派として共同体を維持している人々の場合に、どのように共同体固有の音楽の伝統は保持され、そしてどのように、共同体の枠を超える音楽は関わりを持っているだろうか。以下に、まずアレppoの歴史と現在にみられる種々の共同体の構成を概観し、さらに、対象となる共同体の人々（ウルファ出身のため以下ではウルファグループと呼ぶこととする）がどのように共同体組織を維持しているかを見てゆきたい。次いで、このウルファグループ内に見られる上記の二つの種類の音楽の内容と共同体組織との関連について述べ、考察してゆきたい。

なお本稿での音楽という語は、音による表現あるいは音をもちいる行為すべてをさしている。従ってここでの音楽文化という言葉は、音によって表現される内容あるいは音のもちいられる目的如何を問わず音に関係する文化内容すべてを意味している。またここでは、音組織その他の音楽的内容自体には触れない。これについては稿を改めて論じることとし、ここでは、少数派として共同体的結束を保っている人々の中での、音楽文化のあり方と、その音楽文化と共同体組織との関係のみに関心を絞ってゆきたい。

目 次

- I-1 アレッポの歴史と現在
- I-2 シリア正教会ウルファグループの共同体
 - i 居住地域と信者組織 ii 教会運営組織
 - iii 教育組織 iv 信者の生活
 - v ウルファグループの言語—シリア語との関連
- II-1 ウルファグループ内で保持される音楽
 - i 聖餐式 ii 祈禱歌 iii 民謡
 - iv 子供達の歌 v i ~ iv 以外のもの
 - vi 伝統継承の教育 vii 助祭の役割
- II-2 ウルファグループをめぐる音楽
 - i 共同体外の音楽
 - ii 共同体内の職業音楽家
- III 結 論

I-1 アレッポの歴史と現在

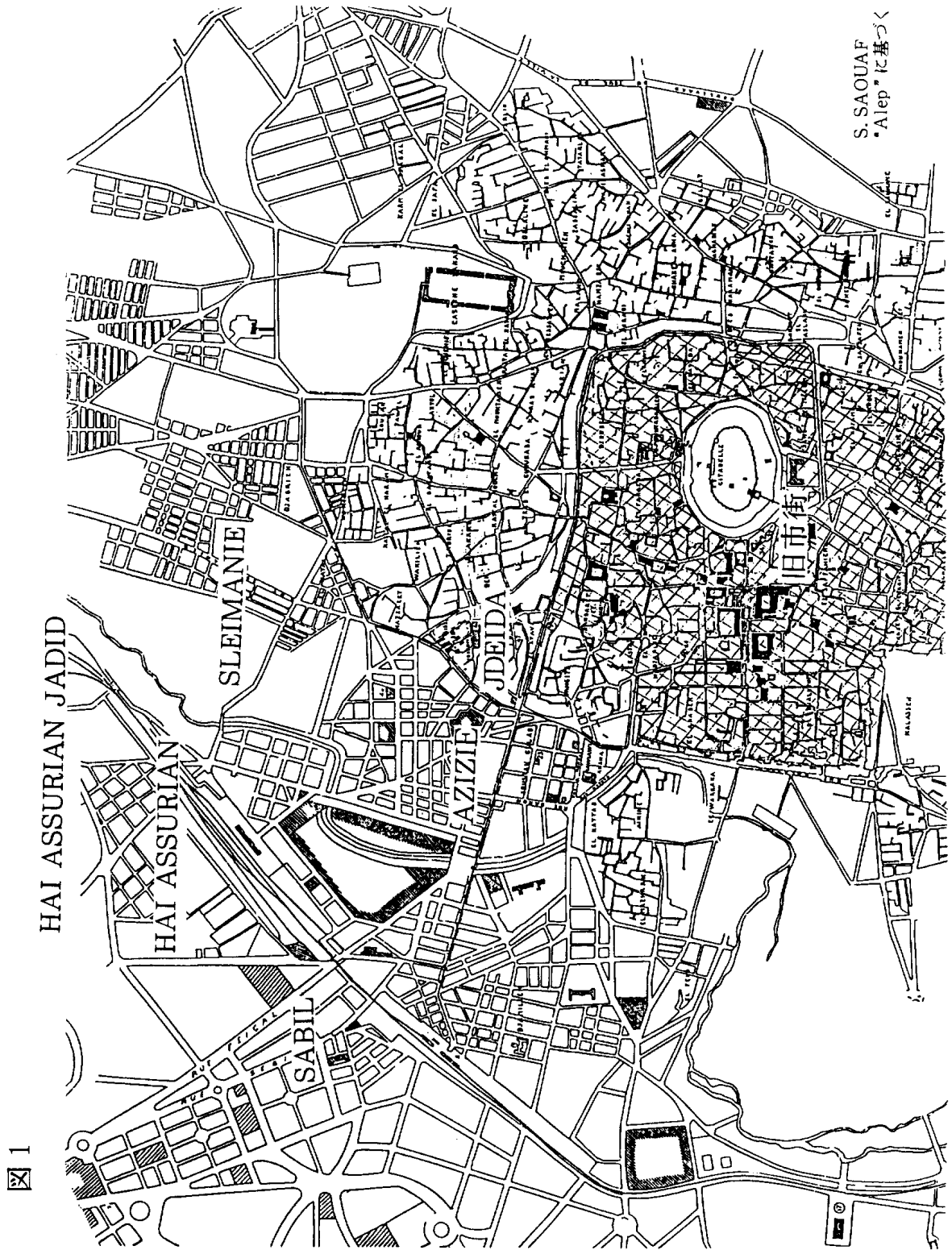
アレッポは現在のシリアアラブ共和国の北部に位置する都市である。ビザンツ時代には主要な主教座の一となり、636年ムスリムによる征服以前はキリスト教徒の地であった。イスラムの支配のもとではキリスト教徒は、ユダヤ教徒とともに「啓示の民」として容認されていたが、次第に勢力は弱められた。また言語面でも13世紀頃にはそれまでのシリア語にとってかわり、アラビア語が日常会話に用いられるようになった。イスラム時代に入って以降もアレッポは様々の支配者を体験したが、中でも10～11世紀初頭にかけてはハマダーン朝の首都として栄えた。ハマダーン朝はアル・ファーラビー、アル・イスファハーニの活躍で知られている。十字軍の時代までにはシリアには、アラウィー派、ドルーズ派のようなイ

スラムの中での少数派も現われ、クルド族、トルコ人、シャルカス人（コーカサス人）その他の民族が歴史に登場するようになっている。さらにオスマン・トルコの時代になると宗教的、民族的共同体は以下のように多数になっていた。ムスリムでは、スンニー、シーア、イスマイール、アラウィー、ドルーズの各派、キリスト教ではシリア正教（ヤコブ派）、シリア・カトリック、アッシリア正教（ネストリウス派）、カルデア派、ギリシア正教、ギリシア・カトリック（メルク派）、マロン派、アルメニア正教、同カトリック、同プロテスタント。他に宗教としてはユダヤ教、ヤズィード教があり、民族としてはクルド族、トルコ人、トルクメン人、ペルシア人、シャルカス人等がある。これらの人々は少数派であればある程強固な閉ざされた共同体を成し、オスマン帝国のもとではミッラ制度により編成されていた。シリアにおけるこれらの諸共同体の存在は19世紀以降のいわゆる「東方問題」におけるヨーロッパ列強の政策の手段ともなり、現在まで内紛の絶えない原因ともなっている。

現在、アレッポは最新の国勢調査（1981）によれば、人口約98.5万人のシリア第2の都市である。市街は城砦を中心とする旧市街とこれをとり囲む新市街より成る（図1：斜線の部分が旧市街。この地図では市南部が欠けている）。共同体による住み分けが整然となされているわけではないが、旧市街及び旧市街に接する東部南部の地域はムスリムの地域である。それに対し旧市街に接するJDEIDA地区には各派の古いキリスト教会が多い。¹⁾ またここから西北に広がるAZIZIE, SLEIMANIE地区はキリスト教徒の多い地域である。市街の西部と北部とは新しい地域であり、特に北部にはアルメニア人が多く住んでいる。

I-2 シリア正教会ウルファグループの共同体

シリア正教会はキリスト単性論派の一派であり、西アジアを中心に、インド、ヨーロッパ他にも信者を持つ。²⁾ その起源は451年カルケドン公会議の決定を受け入れないことから、アンティオケ総主教区から分離すること





により生まれた。ヤコブ派とも呼ばれるが、それはエデッサ（現在のトルコ領ウルファ）で6世紀にこの宗派を組織したヤコブ・バラデウスに因む名である。エデッサははやくからキリスト教文化の中心地であり、70人訳旧約聖書と福音書のシリア語への翻訳がおこなわれたのもこの地である。

今日シリア正教会の内部には、西シリア式と東シリア式の二つの伝統がある。西シリア式はさらに二つの流れからなり、一つはエデッサすなわち今日のウルファ（図2）に伝わる伝統であり、他の一つはより東部にあるマールディーン及びトゥール・アブディーンの地区に伝わる伝統である。今日この両者の伝統を担う人々はトルコ領内よりシリアに移住してきている。すでに述べたように、ウルファの人々は政治的原因により、1924年すべての共同体成員がアレッポに移住した。これに対し、トルコ東南部のマールディーン他の地域からの移民は何ら特別の政治的原因によるものではない。しかしそのシリア領内への移住は非常に多く、人々はトルコ国境に近いシリアのカミシュリ、ハッサケ地区から、アレッポ及びダマスカス

に移ってきている。現在シリアでもっとも人数の多い人々はこのグループの人々である。なお、シリア正教会の総主教座は13世紀よりマールディーンに近い Zaafaran 修道院におかれてあり、神学校、印刷所等の施設も長らくこのグループの伝統のもとで運営されていた。今日総主教座はダマスカスにおかれ、神学校もレバノンを経てダマスカスに開設されているが、現在シリア正教会全体の主流をなしているのはこの人々の伝統である。また、東シリア式と呼ばれるのはイラクのモースルを中心とする伝統である。西式のエデッサ、マールディーン両伝統とは異なる内容を伝えている。

以上のシリア正教会の各派の中で今日では西式のマールディーンの伝統が中心となり、東西各地の伝統は統一されようとしている。そしてウルファグループの伝統は、最少数派としての位置におかれている。信徒数ももっとも少数であり現在アレppoに住む人々がその大部分を占める。そして彼らが伝えてきた音楽的伝統も、今日正教会の神学校で教えられているものとは異なる特殊の内容をもつものとみなされつつある。現在アレppoには二つのシリア正教会があるが、アレppo主教座でもある SLEIMANIE 地区の聖エフREM教会は、マールディーン他の出身の人々のもとにある。ウルファグループの教会はグループの居住地の中心にある聖ゲオルギウス教会である。ここで最少数派としての彼らがどのような共同体を組織しているかみてゆきたい。

i 居住地域と信者組織

ウルファグループの人々は、その大多数が、アレppo西北部の「ハイ・スリアン」³⁾ 地区とそのすぐ北に位置する「ハイ・スリアン・ジャディード」⁴⁾ 地区に住む。ハイ・スリアン地区はこの人々が1924年にウルファから移住して来た際に住み着いた地域であり、現在はここに約850家族、5000人が住む。⁵⁾ 聖ゲオルギウス教会はこの地区にある。ハイ・スリアン・ジャディード地区には、ハイ・スリアン地区から移った約200家族1200人が住む。こちらの方が街並みも新しく住民の所得も高い。この二地区の他、少数の人々が市内の他の地区に住んでいる。それらの人々は約75

家族 450 人で、より市の中心部に近い AZIZIE 地区と SLEIMANIE 地区、及び市西北部に広がる近代的な高級住宅街 SABIL 地区に住む。これらはいずれも市内でも生活水準の高い地域に属している。この人々は聖餐式その他の際には、遠距離であるにもかかわらずハイ・スリアン地区にある聖ゲオルギウス教会に通っている。ウルファグループの人々の居住地区の分布を総観すると、まず最初に住みついたハイ・スリアン地区から、人口の増加に従って、所得の高い層から順次ハイ・スリアン地区を出て、ハイ・スリアン・ジャディード、AZIZIE 地区、SLEIMANIE 地区、SABIL 地区に拡がっていったとみることができる。

以上のウルファグループの人々は、教会を中心として、現シリア政府の行政組織とも、同じシリア正教会の他の教会の信者とも関わりのない、グループ内の信者間の自治的な運営組織を持っている。それはオンダリック⁶⁾と呼ばれ、毎日曜、聖餐式の後に、教会の二人の司祭を中心に会議が開かれる。この会議はグループの人々からウルファに住んでいた当時の伝統を持ち、グループ内の 18 歳以上の男女は誰でも参加することができる。ここでは教会に関する事柄はすべて議題にとりあげられ討議される。またオンダリックは二つの下部組織を持つ。それぞれ福祉のための委員会で、一方は貧しい信者のため、もう一方は病気の信者のためのものである。これらは信者からの寄付金により運営されている。

ii 教会運営組織

上記のオンダリックの他に、教会には教会自体の運営組織がある。これはアレppo主教を頭とするもので、主教により任命された副頭とその副頭の選んだ 11 人の委員との、計 12 人の無酬の委員からなる委員会である。彼らは任期である二年間、a. 教会の運営に関する事柄、b. 教会の収入と支出に関する事柄、c. 教会の運営する小学校に関する事柄、を扱う。なお、教会の収入は基本的に、信者からの寄付とワクフよりの収益からなる。

また教会の宗教的行事、宗教的伝統の維持と教育の実際については、司

祭と助祭とがこれにあたっている。聖ゲオルギウス教会には現在二人の司祭がおり、いずれもウルファグループ内の出身である。ウルファグループ内には、司祭あるいは助祭の特別の家柄というものは存在しない。一般に司祭は、各教会の助祭の中から、現在はダマスカス他にある神学校に学び、また各地の教会に助祭として在籍しその他の大学等で学んだ後、職業として聖職者となることを選んだ者になる。そのため自らの共同体以外の伝統に触れることが多い。また自らの出身地以外の教会に任命されることもあり得る。しかし場合によっては、神学校に学ばずとも、その教会の組織の運営する助祭たちのための教育コースを受けた後、優秀な者が主教により任命されて司祭となる。

ハイ・スリアンの聖ゲオルギウス教会の神父は

a. 35才⁷⁾ 神学校に学ぶ

b. 27才 神学校には学ばず、聖ゲオルギウス教会の助祭のための教育コースを受けた後司祭となる。

の二人である。

司祭が職業としての聖職者であるのに対し助祭は在俗の人々である。ハイ・スリアン地区では男子の15パーセントが助祭となる。助祭は無報酬で、教会の朝夕の祈禱、聖餐式その他の教会の儀式に、司祭とともに参加し、司祭をたすけて式をとりおこなってゆく。シリア正教会の助祭には4段階の階級がある。上から

a. エワンゲローヨー `福音助祭`

b. アフディヤクノー `補佐` "

c. コールーヨー `朗読` "

d. ムザムローノー `唱歌` "

であるが、現在聖ゲオルギウス教会にはb, c, dの三種の階級の助祭のみがいる。

iii 教育組織

アレppoのシリア正教会の二つの教会はそれぞれ、教会所有の小学校を

経営している。現在シリアでは学校は国営で、私立学校は存在しない。そのためこれら二つの小学校は校長のみ、政府より派遣される。そして校長の給与のみは政府によって支払われている。この学校では、他の国営小学校とは異なり、シリア語、教会での聖歌の斉唱部（独唱部分は学校では教えられる）、礼拝についての教え、のカリキュラムがある。

この他、ハイ・スリアン地区では、学校の休暇の間、子供たちのためと、後述の聖歌隊の隊員のためとの、二つのシリア語の夏期学校が開設される。いずれも週三日、夕方一時間半のもので、子供たちのクラスでは聖歌の独唱部分も助祭によって教授されている。さらにハイ・スリアン地区では毎週一度、若い助祭たちのための教育コースが設けられている。以上の教育の費用は、教会と子供達の親とが持つ。

iv 信者の生活

ハイ・スリアン地区の人々の大多数は、地区内で自営業に従事するか、市内の企業に勤める。助祭である人々も同様である。また信者の結婚は70パーセント程度まで地区内でおこなわれる。イスラム教徒と結婚する場合は男女を問わず地区を出なければならない。現在までイスラム教徒との結婚により出た男子は無い。女子には少数ある。他のキリスト諸教会の信者との結婚は10パーセント程度である。

v ウルファグループの言語—シリア語との関係

シリア正教会では典礼語としてシリア語が現在まで使われている。さらにシリア語は単に礼拝の中のみならず、教会での聖職者の会話にももちいられる。ハイ・スリアン地区でも、司祭、助祭を含め100人程度の人々は日常時にもシリア語を話す。ただこれは、元来教会の中、また助祭たちの教育の中で伝えられてきたシリア語を、第一次大戦後アレppoに移住してきたシリア正教会のグループでシリア語を日常語としていたトゥール・アブディーン出身の人々の助けを得て、1930年代後半から40年代に復興に務めた結果である。当時は言葉のみならず、彼ら自身の伝統を見なおし復

興して共同体意識を昂めることが意識的になされた。民族主義的なシリア語の歌詞が古い聖歌の旋律につけられ、ポピュラーソングとして歌われたりした。現在でもシリア語の教育は大変熱心である。

教会外でのハイ・スリアン地区の人々の生活の中で使われる言語は、現在ではアラビア語がもっとも多い。しかし、60歳以上の年代ではアラビア語とともにトルコ語が多く使われる。八十歳程度の高齢者では、アラビア語をほとんど話さない者もある。またこの地区ではアルメニア語も頻繁に聴かれる。さらに、第一次大戦後のフランス委任統治の影響のため、40代以上の人々の多くがフランス語を話す。

以上が現在のウルファグループの共同体組織の内容であるが、この共同体の内部でどのような音楽文化が保たれているかを次にみてゆきたい。まず、はじめにのべた二つの種類の中で第一の、共同体内で保持される音楽はどのようなものがあり、共同体組織とどのように関わっているかを述べてゆくこととする。

II-1 ウルファグループ内で保持される音楽

i 聖餐式

ハイ・スリアン地区の聖ゲオルギウス教会では、毎週、日曜の朝、火曜の夕、金曜の朝に聖餐式がとりおこなわれる。本来これは日曜の朝にあるべきものであるが、イスラム教国であるシリアでは金曜日が休日のため、日曜の朝に教会に出られない人々のために日曜以外にもとりおこなわれる。前述の助祭たちも、日曜朝には仕事に出る場合は他の日の聖餐式に加わることになる。

シリア正教会の聖歌には、八種類の教会調ともいうべき旋律のグループ分けのシステムがあり、聖餐式も、教会暦に従って、一週毎に順番に第一調から第八調までのきまりの中でおこなわれる。今日では本来の八種の教会調は聖餐式内では失われて、かわりにマカームがもちいられるが、マ

カームをもちいる場合でも、その週によって元来の教会調との関連づけは保たれている。現在どの程度本来の伝統との関連が保たれているかはシリア正教会の中でも各伝統の流派に従って異っている。ウルファグループの伝統では例えば第1調の週には聖餐式はイスファハーニーでうたわれる。聖餐式の内部では、書簡の朗読他極く限られた部分を除いて、すべての言葉が旋律をともなうたわれるが、それらの旋律はいずれも即興ではなく、各調ごとに決まった旋律が伝えられ守られている。これらの旋律をうたうのは、司祭と助祭たちである。また、聖餐式という言葉の旋律は、最初は必ず教会暦に従って定められた調子でうたわなければならないが、途中で変更することが許される。そのさい、旋律を異なる調に転じるきっかけを作ることが許されているのは司祭と、助祭長のみである。言葉は式の大部分がシリア語。書簡朗読と説教の一部でアラビア語が使われる。

ii 祈禱歌

現在シリア正教会では平日朝と夕の二度、祈禱がおこなわれる。これは本来七度おこなわれていたものをまとめ、二度に再分割したもので、各々いくつかの聖歌からなる。この平日の祈禱と、日曜朝の祈禱にはそれぞれ、伝統的な各種の祈禱書がつかわれているが、各々の祈禱文には、その週により第一から第八までの教会調に分類され得る固有の旋律がともなわれている。ウルファグループの人々はこれらの祈禱の旋律の伝統を守るとともに、伝統保存の試みをはじめている。すなわち、ウルファから移住してきた世代の司祭と助祭による、祈禱歌の録音テープを制作し保存している。これには海外から彼らの聖歌を録音しに来た研究者の存在がきっかけとなっている。言葉はすべてシリア語である。

iii 民謡

教会の伝統以外でのハイ・スリアン地区の人々の音楽生活には、言語の面でのシリア語に匹敵するような特別のものはみられない。シリア語の歌は少数みられるがそれらは1930年代から40年代に新しく歌詞を作って、

伝統的な聖歌の旋律につけたものである。教会あるいは民族的意識と全く関係なく人々の歌うものとしては、シリア語の歌は無い。今回の調査での民謡としては、一人の金細工師 (58才) による、トルコからのラジオ放送と市販テープによって覚えたという、トルコ語の歌のみがあげられる。

iv 子供達の歌

ハイ・スリアン地区の子供達の歌には、大きく分けて3つのグループがある。その1は、学校及びハイ・スリアン地区で教えられる歌である。これには学校で習う政府広報の歌「アサド大統領を称える」などがある。また上に触れたシリア語の民族主義的な歌。さらに学校で教わる絵描き歌の類。第2に、テレビを通して覚える歌、ダンスの歌がある。そして第3にわらべうたがある。これらは、第1のグループのシリア語の歌を除けばほとんどがアラビア語である。中にはフランス語のものもある。総じて、子供達の歌には、遊び歌も含めて、学校とテレビの影響が非常に濃い。

v i～iv以外のもの

ハイ・スリアン地区の音楽活動としては、上記の他に、主に青少年による、二つのグループがある。一つは教会の聖歌隊である。聖ゲオルギウス教会では、1960年前後から、聖歌隊が組織されており、隊員は主に大学生の男女である。聖餐式、結婚式などにさいし、古くから伝わるシリア聖歌の斉唱部分をうたう。伴奏に15年前から電子オルガンがもちいられる。第二はスカウトの音楽隊である。これは1946年からあり、ヨーロッパ音楽の金管楽器と打楽器でマーチを演奏する。

以上が現在のウルファグループの人々の音楽であるが、ここで、音楽に関する伝統継承の教育についてもみてゆきたい。

vi 伝統継承の教育

以上にあげた音楽の中で、iとiiは教会の伝統に属するものであり、その教育は教会を中心におこなわれている。特に、聖餐式と祈禱の担い手で

ある助祭への教育は常に教会の内外でおこなわれている。まず子供たちは男女とも、教会経営の小学校で7才から、聖歌の時間に斉唱部分の旋律を教わる。この斉唱部分は、聖餐式の場合、男女にかかわらず、会衆が一緒に聖歌をうたう箇所であり、特に助祭になるのではない場合でも、信者のすべてが知っているべき旋律といえる。このうち男子のみ8、9才から教会で助祭に加わり、実際の儀式に参加してゆくことを通して、独唱部分の旋律を聴き覚えてゆく。さらに前述のように、学校の休みとなる夏期休暇などには、週三日の夏期学校が開設され、そこで聖歌の独唱部分が教えられている。ここでは教会の助祭長（44才）が口伝えの教授法で教師を勤めている。

またvの聖歌隊も、教会の伝統に関わるものである。聖歌隊の創設された当初は、助祭たちによって指導されていた。今日では、現在のウルファグループの中で唯一の職業音楽家である、アレppoの音楽師範学校の教師（47才）が、古い伝統を知る助祭たちの協力を得て聖歌隊を指導している。彼自身も以前は助祭であった。なおスカウトの音楽隊に関しては、助祭の一人であるアマチュア音楽家（42才）が指導している。

vii 助祭の役割

以上に述べてきた音楽は、共同体で保持され、伝えられてゆく種類の音楽であるが、このようにみえてくると、伝統の維持と継承教育には、助祭という存在が重要な役割を果たしていることに気づかされる。助祭という組織は上述のように、職業的な聖職者ではなく信者たちの一部である。彼らは共同体の中で、代々伝えられる聖歌の伝統を受け継ぎ、次の世代へと伝えていっている。そして彼らの集団は、司祭の出身の母胎ともなっている。助祭たちと、その集団から出た司祭とは、伝統の維持と伝統継承教育のための組織の中核をなし、次代の司祭と助祭たちの教育も、上の世代の司祭と助祭たちによっておこなわれる。ただこの場合、司祭に関しては、助祭として他の地の教会に在籍したり、神学校に学ぶ場合が多い。神学校では、すべてのシリア正教会の伝統の中で決められた、いわば主流となる伝統が

教授される。シリア正教会の中に存在するそれぞれの共同体ごとの伝統の相違はここでは、淘汰されて吸収されてゆく。従って神学校で学ぶ伝統はすでに、個々の教会を中心とする各共同体の伝統とは異ったものとなっている。そのため司祭という存在は、助祭に比して、その共同体固有の伝統から遠いものとなっているといえる。この点、このハイ・スリアンの聖ゲオルギウス教会の二人の司祭の中で、新しい若い司祭は、神学校に行かずにウルファグループの伝統の中で教育されている。この点にもこの共同体の人々の自らの伝統に対する熱意をうかがうことができる。

II-2 ウルファグループをめぐる音楽

ここで次に、ウルファグループの共同体をめぐって存在する、共同体の枠に縛られない音楽について述べてゆくことにしたい。まず共同体の外から入ってくる音楽についてみてゆくこととする。

i 共同体外の音楽

ハイ・スリアン地区の人々にとって、もっとも手軽に共同体外の音楽に触れる手段は、テレビあるいはラジオに耳を傾けることである。上述の民謡あるいは子供の歌の項でみられたように、マス・メディアの影響は非常に大きい。この地区ではラジオ、テレビともにダマスカスからのアラビア語放送と、イスタンブールからのトルコ語放送があり、人々はそのいずれをも楽しんでいる。

次に、実際に外の音楽が入ってくる機会がある。それは結婚式のパーティー等にさいして、音楽家を招く場合である。これらの職業音楽家はアレppo市内から招かれることもあれば、ウルファから招かれて来ることもある。さらに、趣味としてアレppoの音楽家に、ウード、カーヌーン等を学ぶ者も少数ある。

このように見ると、共同体の枠組を超えて入ってくる音楽は、すべて職業音楽家による音楽である。職業音楽家を、共同体の枠組に縛られず、自

らの属する共同体外の音楽文化との繋がりを持つ存在とみると、共同体外の音楽との関連に向けられた視点は、共同体内の職業音楽家にも向けられる。ウルファグループ内の職業音楽家は、どのような活動をし、どのように、自らの属する共同体の音楽的伝統に関わっているだろうか。次にこの点についてみてゆきたい。

ii 共同体内の職業音楽家

現在のウルファグループの人々の中で、音楽を職業としているのは、前述の聖歌隊の指導をしている、アレppoの音楽教員養成の師範学校の教師(47才)のみである⁸⁾。彼が、どのようにしてウルファグループ唯一の職業音楽家となっていったか、まずその経歴を追ってみよう。

a. 経歴：1938年ハイ・スリアン地区で生まれた彼は最初、他の少年達とともに6、7才頃から聖ゲオルギウス教会の助祭となり、1958年まで続ける。その間スカウトの音楽家に加わりトランペットを学ぶ。1958年に1年間、当時アレppoに滞在していたロシア人M・ボリザンコにバイオリンを学ぶ。その後1959～1964年エジプトのカイロに留学する。カイロでは高等音楽院で音楽教育を専攻し、ピアノ、バイオリンの演奏及び、ソルフェージュ、和声法、楽曲分析を学ぶ。1964年アレppoに戻って音楽教師となり、ウード演奏を学び始める。1970～1974年レバノンのベイルートへ行き、ベイルートのシリア正教徒のフォークロア音楽の研究をする。1974～1975年ダマスカスのテレビ局で音楽関係の仕事に就き、1975年以降アレppoに戻る。現在は音楽教師養成の師範学校で、ソルフェージュ、音楽理論、学校教育の中での歌の教え方、を教えている。

b. 共同体の音楽伝統との関わり：彼は上述のように音楽教育の専門家であり、音楽研究者である。ウルファグループの伝統的聖歌を、古い世代の司祭、助祭たちにより録音し、採譜して、聖歌の楽譜を作成している。さらに聖歌の音程分析をするなどの研究に携わっている。聖歌隊の指導にあたっては彼自身の採譜した楽譜をもちいる。また聖歌隊の指導では、助祭たちに聖歌をうたってもらいそれを楽譜にとってもちいることもある。さ

らに、聖歌隊によって、カーヌーン、ウード他の楽器の演奏をつけ加えた聖歌のレコーディングをし、テープを作成している。また以前には聖歌を編曲して新しい歌を創作していた。

経歴においてみられたように、最初彼は他の少年達と同じように助祭として、共同体の伝統に関わってゆこうとする。その後スカウトのトランペット、ボリザンコのバイオリンに触れ、職業として音楽を選ぶために共同体を離れてカイロに留学し、そこで西洋近代音楽の理論と技術を身につけている。そしてアレppoに戻った後、共同体の伝統の維持、継承に対しても、特に録音、採譜、分析という西洋近代音楽の技術をもって関わってゆこうとしている。この場合、助祭組織のように、以前からのやり方に従った口伝え、耳で覚えるという方法でないため、共同体内の人々からは「科学的」と評価されている。しかし、以前の世代の司祭及び助祭たちによって録音されたテープの聖歌を伝統の本来の姿と考え、そのテープから採譜された楽譜を研究、教育の基準とするその態度は、現在の教会内の生きた伝統の継承者である助祭たちとの間に、緊張感を含んだ関係をもたらしている。今日この職業音楽家は、共同体内の音楽伝統の研究、教育に関して大きな影響力をもつ存在となっている。

以上のように見てくると、ウルファグループの人々をめぐる音楽が、共同体内で保持される伝統音楽に対してもっとも直接的な関わりをもつのは、共同体内の職業音楽家を通じてであるということができる。

III 結 論

ウルファグループにおいて、共同体の内部で保持される音楽は、助祭という共同体組織と密接に関係している。彼らは無報酬であり、シリア語の *shāmōshō*、アラビア語の *Shammās* という名の意味「奉仕者」の示す通り、教会の伝統維持とその教育に中心的役割を果たしている。音楽的伝統も本来は彼らによって保持され、教育され伝えられてゆくものであった。そしてこの人々は聖職者ではなく、共同体成員の男子の15パーセントが

助祭となるという数字にも現れているように、非常に身近な存在である。共同体成員の中で音楽の好きな者、上手な者はほとんどが助祭となり、伝統音楽の担い手となるのである。このことは逆に、共同体成員にとって伝統音楽を非常に身近なものとしているとすることができる。これらの人々は聖歌を通じて常に積極的に共同体の伝統に向きあい、自らの共同体帰属意識を確認することになる。様々の聖歌は、実際の教会での典礼、教会経営の小学校での聖歌教育、助祭による教育、そして聖歌隊での教育によって、グループの人々にとって非常に身近なものとなっている。聖歌が人々の共同体意識に結びついたものであるのは、1930～40年代に、人々の共同体意識を昂めるために古い聖歌の旋律にシリア語の新しい歌詞をつけてもちいたという事実にもうかがえる。またそのような歌が現在小学校でも教えられ続けており、子供達が歌っているということにも現われている。これらの、共同体の中で、助祭たちにより保持されている聖歌は、いわば、生きた共同体の中で、共同体成員による職業化されていない組織によって担われ、共同体成員の共同体への帰属意識を保ってゆく機能をもつ音楽である。

これに対し、共同体の枠を超えてウルファグループをめぐる音楽が、共同体内の職業音楽家を通じて、共同体内の伝統に関わりをもつものであるのは上にみた通りである。職業音楽家の場合、その存在は、共同体内の伝統よりも、共同体外の、共同体に関係なく自立した、音楽文化との繋がりが密接になる。そして職業音楽家は、自立した、共同体にとっては外来とって良い音楽文化の知識と、技術とをもって、自らの共同体の伝統に関わることになる。ウルファグループでの場合、職業音楽家の伝統への取り組みは、1960年代に録音された「現在のものより正確な」聖歌と、この録音された聖歌の採譜、及び現在の助祭の歌唱による聖歌の採譜という、録音テープと楽譜という二つの手段を拠所としている。ここでは聖歌は、録音、採譜という固定化を経ることによって、助祭たちによるいわば生きた伝統から隔離されたものとなる。そして共同体内で培われ保持されてきた伝統は、自然な変化という契機を失い、人工的に固定化されたものとなっ

て、本来の生命力は質的变化を受ける。そしてその代りに、聖歌は、様式化される一つの「音楽」として扱われることになり、新しい楽器との組み合わせ等の試みがされるようになる。ある意味では、助祭たちにとってそして共同体成員にとっては本来、非常に身近に生活の中に浸透していた、共同体の伝統文化の一部であったものが、ここで、特定の様式をもった「音楽」として意識しなおされてゆくともいえる。

ここには、音楽から、主として音による美的価値によって成り立つ「音楽」への意識の転換がある。

伝統的な聖歌に職業として関係すると、本来の共同体の生きた伝統と隔たりが生ずるというこの傾向は、共同体の伝統を支える中心的な人々の間にもみられる。すなわち、聖職者ではない助祭たちは、各々所属する共同体から動くことはなく、自らの伝統を代々伝えてゆく。これに対して宗教職としての司祭及び主教は、他の教区に移動する場合もあり、特定の共同体の伝統から離れることも多い。いいかえると、ここでは、共同体内で共同体成員の帰属意識を保ってゆく機能をもつ、固有の音楽的伝統は、共同体内の成員からなる組織によって担われており、職業化されていないのが特徴といえる。これに対し、職業音楽家は、共同体固有の伝統に対し、自立した「音楽」という契機をもって関わってゆく。最初に設定した二つの種類の音楽は、このようにそれぞれ共同体内の人々の組織と結びつきを持ち、拮抗しながら、現在のウルフグループの音楽文化を織り成している。

さらに共同体内でのこの二つの種類の音楽相互の関係についていえば、「音楽」という意識の成立がその関係の接点であるということができる。共同体の枠を超えて伝達される音楽は、それまで「音楽」として意識されていなかった共同体内の伝統に対し、職業音楽家の存在を通して働きかける糸口を見出している。そしてその伝統に「音楽」としての位置づけを与えて、自らの一部と成してゆく。実際に、楽器の演奏をつけ加えた聖歌の演奏テープは、外来者に対する商品としても生産されている。共同体内部で伝達され保持される伝統であった聖歌は、「音楽」商品となることによって、共同体の枠を超えて共有される音楽の一部となりつつあるのである。

逆にいえば、先の二つの種類の音楽の中で第二のものは「音楽」という意識を前提としてはじめて成り立つものであったともいえよう。

共同体内で保持されてきた伝統を「音楽」として意識しなおすという作業は、共同体の枠を超えた自立的な存在である音楽文化を視野に入れてはじめて可能である。それは自らを外部との比較の位置づけのうちに見い出すことを意味する。共同体内の伝統の中心として絶対的存在であった聖歌は、外部世界に共通な「音楽」の一部として評価しなおされるのである。ウルファグループの人々が、聖歌を中心とする共同体の伝統に「音楽」としての価値の側面を見い出したからといって、聖歌が共同体に対してもっていた絶対的な価値を失うわけではない。聖歌の価値の意味づけは、純粹に音楽に関する面によってのみなされるのではないからである。しかしウルファグループの現実において、伝統内容に関しての「音楽」の意識の成立は、生きたものとしての伝統の生命力に対してむしろ対立的であるように思われる。

最後に、本稿のデータはすべてウルファグループの人々、特にシリア語教師アブロム・ヌーロ氏及び助祭長ヤコブ・タッハン氏のご協力の賜であることを記しておきたい。また、シリア正教会に関する筆者の調査を常に後援して下さっているシリア正教会総主教イグナチウス・ザッカ I 世イワス猊下に厚く感謝の意を表しておきたい。

註

- 1) この地域は SAUVAGET (1941) 及び WIRTH (「SYRIEN (1971) によればオスマン時代からのキリスト教徒地区である。
- 2) インドには古来からの教会があるが、ヨーロッパその他は西アジアからの移民である。なお、シリア国内でのシリア正教徒の数については拙稿「シリア正教会：聖餐式の音組織」(音楽之友社『諸民族の音』所収, 1986) を参照されたい。
- 3) 正式には「ハイ・アッスリアン」‘シリア正教徒地区’の意, アラビア語。
- 4) ‘新シリア正教徒地区’の意, アラビア語。
- 5) 以下の信者数についての数字はアブロム・ヌーロ氏による。なおシリアでの1家族は5～6人である。

- 6) ONDALIK `10 の部屋' の意, トルコ語。元来信者が収入の $\frac{1}{10}$ を収めたからとも, 10 人の信者で組織されたからともいわれる。
- 7) 以下年齢は 1985 年当時。
- 8) ウルファグループ出身の職業音楽家としては他にバイオリニストが一人いるが, 10 年以上以前からウィーンに滞在している。

参考文献

SAOUAF, S.,

Alep, GUIDE DES VISITEURS, Aleppo

SAUVAGET, J.,

1941, *ALEP*, PARIS

WIRTH, E.,

1971, *SYRIEN*, DARMSTADT

P. K. ヒッティ (小玉新次郎訳)

1963, 「シリア」紀伊国屋書店

前嶋信次編「西アジア史」1972, 山川出版社